

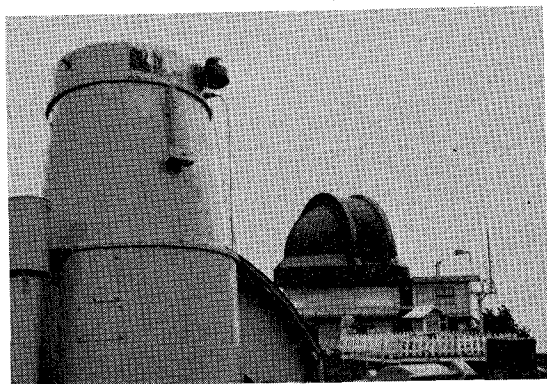
# 堂平観測所のひとびと

早川 和夫\*

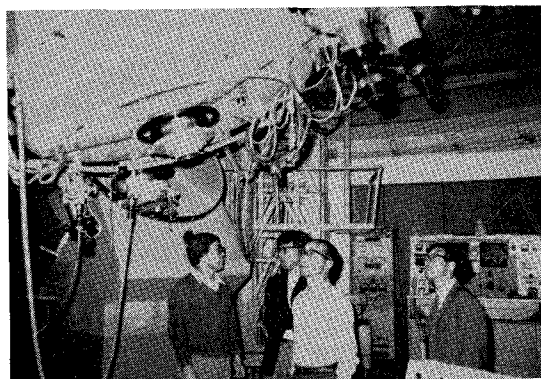
やわらかい太陽の光がふりそそぐ1月はじめの早朝、観測宿舎から36インチドームへの小径を登ってゆくと、すっかり枯れた芝生が、ところどころドーム状に盛り上がり、黒土がはみ出している。昨夜宿直だった職員の岩田さんと朝の挨拶を交わしながら、盛り土のことを聞いてみると、それは“モグラです”という返事である。盲のモグラも星を見たいのだろうか。もっとも、天文学者も厚い大気の下に住むモグラみたいな存在かなと考えながら、ドームの丘を登りつめる。

私がこの観測所に、はじめて登ったのは開所して間もない昭和38年1月であった。日本天文学会の大塚奨学金を頂いて、古畑先生と北村、田鍋、斉藤各氏の指導で「月面偏光観測」をはじめてから、5年の才月が流れた。当時は36インチのドームだけだった標高876mのこの丘のまわりには、今では50cmシュミット彗星望遠鏡、流星儀、極および夜光観測室、ペーカーナン・カメラ、観測員宿舎がとりまいている。さらに、人工衛星観測用のレーザー望遠鏡が新設され、つぎつぎと造られる観測室で、山肌も昔のおもむきを失いつつある。

堂平山頂は文字通り平らである。“どうだいら”とはうまく名付けたものだ。はるかに連なる秩父の山々を眺めていると、三鷹から連絡車で2時間半の距離を忘れさせてくれる。9時近く、山麓の都幾川村から8kmの山みちを、堂平の職員たちが出勤してくる。石井さん、柴崎さん、藤野さん、山口博司さん、女性の荻野さん、山口京子さんの6人で、開所以来の古顔が多い。配達された朝刊を見ると、相も変らぬ大学問題がトップ記事であ



第1図 50cmシュミット彗星望遠鏡から36インチ反射望遠鏡のドームを望む



第2図 富田氏から36インチ反射望遠鏡の説明を聞く。左から富田、安田、弓、飯島の各氏

る。しかし、ここはストライキも及ばぬ研究者の別天地である。

36インチドームの入口扉には、“観測者が仮眠中です、静かにお願いします。見学日はきめられています”との趣旨の張紙がしてある。特に、日曜日は家族連れや若い男女のハイキングが多い。玄関の来訪者名簿を見ると、各階層の人が名を連ねている。著名の天文学者、学生、婦人会等雑多であるが、地方別に見ると関東が多い。北海道は北大の福島先生他1、2名であるのは淋しい。私も自分の名前を数カ所に発見して安心した。面白いのは、埼玉県の税務関係者が散見されることである。税金の行方を監視するというわけであろうか。

天文学者でも専門が異なると、堂平に来る機会がないものらしい。学問の分野が細分されてくると、こういうものなのであろう。昭和43年8月、第2回目の月面観測で堂平滞在中、ここは初めてという水沢の弓滋氏が来所された。三鷹の安田、飯島両氏も一緒であった。富田氏の案内に便乗して全施設の説明を受けた。この時50cmシュミット前で写したスナップを、タシケント天文台を訪問した際、シュグロフ台長に進呈したところ、写真中の弓氏を見つけて、“オー、ドクター・ユミ”と喜ばれた。

昼食時になると、職員と観測者は宿舎の食堂に集まる。食事をしながら、今夜の観測予定を打合わせる。食堂の壁の大黒板には、滞在者の氏名と食事表が書き込まれている。朝食と夜食は各自が自由に調理し、代金を計算して書きこんでおく。昼食と夕食は荻野さんが準備してくれる。昼食後の休憩時間はテレビに興ずる。

\* 北海学園大学

三鷹からの観測者は、週に1回、官用車で2時間半かかって堂平に到着する。この道のりはヤルタとクリミヤ天文台よりやや短い。鉄道を利用するには、国電中央線を立川で乗りかえ、八高線の拝島を経て明覚駅で下車し、バスで大野部落までゆき、これより5kmの道のりを白石峠を通り1時間で堂平に着く。乗用車の便がない一般人には、たいへんな道のりである。

観測者の中でも富田氏のタフぶりには驚かされる。午後から、長途三鷹から来山し、その夜は堂平で観測、翌日下山するというありさまである。職業ともなれば、つらいものだと思うが、同氏の観測ぶりを拝見すると学を楽しむ風格がある。私も光電装置の調子が悪く、同氏の援助を受けたが、1月の寒気きびしいドームの中で自分で納得のゆくまでテストをくりかえし、夜の明けのを忘れる有様に、プロの世界のきびしさの一面を発見した。

新設のレーザー望遠鏡を見学する。竹内先生と富田氏のピッタリ意気の合ったテストぶりである。レーザー光線を発射して、人工衛星からの反射光を反射鏡で受けとり、距離を測定する装置だとのことである。観測は昼夜を問わない。天文学も夜から昼へ移行しつつある。

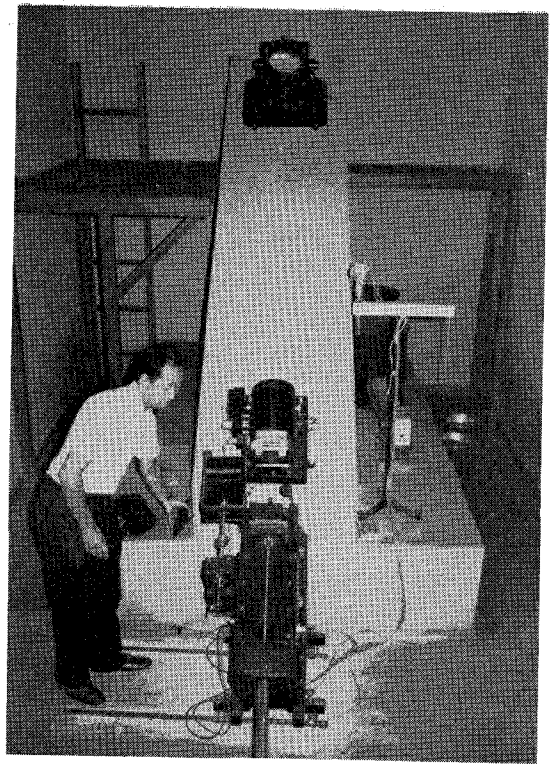
極望遠鏡室は大気光観測室と1棟になっている。屋上には古畑先生御自慢の自動観測装置がある。暗くなると、レンズキャップが自動的に開き、朝がきて明るくなると閉まる装置である。極望遠鏡は関口先生の説明によると、北極星の光が見え始めると自動的にキャップが開いて、観測が開始される。写真乾板も自動的に送られる。

36インチ反射望遠鏡は日本光学製で写真観測に本領を発揮するといわれる。昭和42年の記録では、写真観測は年に72.5夜、光電測光は36夜、分光観測は16.5夜である。観測は高度10度以上可能で、望遠鏡は水平にできない。

私は5年間で3回にわたり、月面偏光観測のため10夜滞在了が、観測は5夜であった。昭和38年1月が最初で、古畑先生の指導を受けたが、月が南中する後夜半、ドームのスリットを開くモーターの低いうなりに起こされて、ねむたい目をこすってドームに入ると、アノラック姿の先生がコントロール・パネルの前にマドロス・パイプで立っておられるのが常であった。めん類がお好きな先生は、いつもソバを自炊しておられた。

昭和43年、44年と2回にわたり、関口先生と月の共同観測を行なうことができた。36インチのガイドは完全自動操作で、コントロール・パネルの赤経、赤緯目盛を合わせておき、始動ボタンを押せば自動的に目標に向く。ところが、時に動かぬことがあり、電気係の御世話になった。職員の石井さんの言によると、この器械は新しい観測者がくると虫をおこすことがあるという。器械も人見知りをするのだろうか。

関口先生は“月面裁判”で天文愛好者にも知られた天文学者である。学者であると同時に、アマ精神の持ち主でもある。私が夜半に観測のためドームの丘に登ってく



第3図 極望遠鏡の乾板交換中の関口氏

ると、三脚を立てて35ミリカメラで星野写真をとったり、36インチのカセグレン焦点で惑星表面の撮影をしている先生の姿が見られた。午前中は堂平連絡係長として事務の仕事も多く、午後は極望遠鏡の調整、夜は私につき合って月面観測をされる等、1人3役の活動振りである。

観測者の寝室兼研究室は、ドーム内に2室、宿舍に5室、ベーカー・ナンに2室ほどある。ドーム内に宿泊すると観測に便利である。宿舍に宿泊すると、観測のために懐中電灯で夜道を照らして、約100m離れたドームに通うことになる。夜半、観測を終ったの宿舍への帰り道、眼の下一面に東京の灯火の海が広がっている。シーイングの良い時は東京タワーもそれと判別できる。いつかは、堂平も都会の影響から逃避しなければならぬまい。公害でなく、光害を逃れるために、その時は北海道にぜひ天文台を考えていただきたい。新天文台長古畑先生がこの願いを取り上げて下さることを期待している。

いま、私の研究室には堂平産の金魚が一匹空中を泳いでいる。職員の山口京子さんが結んで作った黒リボン製の金魚である。金魚は何も言わないが、これを見るたびに、私は堂平の食堂のだんらんを思い起こす。

こうしている間にも、36インチは音もなく星の光を吸い込んで、電気量に変換し、記録紙にインクをこすりつけているであろう。シュミットは彗星を追い、レーザーはピンクの光条を暗黒の天空につき射しているのであらう。